紅家長男　彼の名は九曜。

葉月らゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅家長男　彼の名は九曜。

【Ｎコード】
Ｎ７５１０Ｖ

【作者名】
葉月らゆ

【あらすじ】
少年は久方ぶりに帰ってきた家で姉の不在を知った。※原作第１巻半ばあたりの時間軸。オリキャラものです※（ＨＰにあるものに加筆修正を加えたもの）※本編一応完結。もしかしたら番外編が増えるかも的完結表示。

前編

「……いない？」

久し振りに帰ってきた我が家で、彼は予想外の言葉を聞かされた。

「いないって、姉さまはどこかにお出かけなのですか？」

「ああ、うん。あのね…」

明らかに気分を害した少年に、父親は言いづらそうに言う。

「ちょっと後宮に行っているんだ」

「何やってんですかあなたは！！！」

一拍置いて少年の叫び声が紅邸に響いた。

（全く何で姉さまがあんな甘ったれのために後宮に入らなくてはいけないんだ？）

姉の手作り饅頭でのお茶と手料理による夕餉の一時を楽しみに帰ってきたのに、それが事実上不可能ときて彼は少々苛立っていた。

「よう、九曜。帰ってきてたのか」

「頌栄」

声をかけてきたのは１５，６歳の明るさが特徴的な少年。彼――九曜の友人である頌栄だ。

「どうした？　不機嫌オーラが出てるぞ」

「姉さまがいない」

非常に端的な説明だが頌栄にはこれくらいで十分だろう。

「やっぱりそれか、この姉大好き男が」

「何がいけない。姉さまほど素晴らしい女性はいないぞ」
「……いやあ、俺はやっぱり胸があるほうがいいな」
「脂肪の塊に興味はない」
ある意味、秀麗に対する暴言を吐いた頌栄に対し、九曜は女性全般に暴言を吐く。類は友を呼ぶとはこういうことかもしれない。
「その言葉、お前に懸想している女共に聞かせてやりたいわ……」
頌栄は呆れた目で九曜を見る。しかし、既に意識が姉に飛んだ九曜はそんな言葉も耳に入らない。
「ああ、姉さま……」
「……そんなに会いたいなら会いに行けばいいだろ」
そんな九曜が鬱陶しく思った頌栄は、投げ遣りに言う。会いたいから会いに行く、至極当然の考えだ。
――秀麗が後宮にさえいなければ、であるが。
後宮は主である王以外の男性は立ち入ることが出来ない。それは妃達の身の安全を図るためでもあり、王以外の子を生ませないためでもある。
九曜が男であり朝廷にも関係ない以上、秀麗には会うことが出来ない――はずだが、九曜は名案を聞いたとばかりに目を輝かせた。
「会いに……うん、それいいね。私が姉さまに会いに行けばいいんだよね」
「……あんまり派手なことをするなよ」
「いやだなあ、そんなことするワケないだろう」
その黒く輝く笑顔を見た頌栄は、とんでもないことを言ったようだと思いつつも面白そうだったので、見守ることにした。

＊　＊　＊

「最近朝議に主上がおいでのようだな」

「以前が以前だったからな、どうも三師がなにか策を巡らせたそうだ」
「やはり、すごいなあの方たちは……っと不味い時間がかかり過ぎだ」
「何ぃ！　お前何のんびりしてるんだ吏部尚書に目を付けられるぞ」
「それはいやだっ！！」
官吏たちが慌しく去った後、柱の影から九曜が出てくる。
「姉さまは無事役目を果たされたか、まあ当然だな」
つまらなそうに呟くと、官吏の去ったほうに視線をやり口の端を上げる。
「紅尚書……か」

「なんだこれは。何年この職についているんだ？」
「やる気あるのか貴様」
今日も氷の吏部尚書は健在であった。ばさばさと部下を切って捨てていくと、残されたのは尚書ただ一人。厳しい追及に、皆資料集めなどで出払ったのだ。
そして誰もいなくなった吏部で闇から生まれるように彼は現れた。
「何者だっ」
突然の闖入者に対して厳しく誰何する声があがる。
（返事しなかったら攻撃されちゃうかなあ、やっぱり。それもそれで面白そうだけど…）
時間がもったいないしね、と思い、大人しく名乗りを上げる。
「初めまして、紅黎深殿。私は九曜」
「九曜？　……まさか」
「はい。父上――紅？可が次子、紅九曜です」
「兄上の――！」
これまで九曜が公の場に出たことはなく、黎深も生まれた直後しか知らない。それというのも物心ついたあたりから藍家の末っ子の

ように滅多に家に帰ることが無くなったからだ。だから、流石の黎深といえども目の前の少年が九曜だとは思わなかったのだ。
「ど、どうしたんだい。こ、こんなところまで」
もし誰か見ていたのなら、吏部尚書の豹変振りに目を疑っただろう。
「申し訳ありません。本当なら叔父上を煩わせたくなどなかったのですが、私一人の力では如何ともし難くて……」
目に涙まで溜めるという高等技術まで使ったこの一言に、黎深は落ちた。
「な、何でも言ってくれ。出来る限り叶えようじゃないか」
「あ、有難う御座います。叔父上！」
頼りにされているということに、益々黎深は感極まる。

「早速ですが、見取り図を頂けませんか？」
「見取り図？　ああ、秀麗か。いいよ、あげよう」
そう言って小さく折り畳まれた紙を渡される。
「……随分用意がいいんですね」
「ん、それのことかい？何しろここには救いようのない方向音痴がいるからね。常備してあるんだ」
（大変だなあ、絳攸殿も）
愛情表現はもっと素直にすればいいのに、とは言わないのが正しい処世術だ。
「それでは私はこれで失礼させて頂きます」
「もう行ってしまうのかい？」
さびしそうな黎深の様子に少々良心が痛むような気もしたが、姉さまに代わるものはないとあっさり切り捨てる。
「申し訳ありません叔父上。ですが、早く姉さまにお会いしたいので。……このお礼は今度必ずさせて頂きます」
「お、お礼なら、兄上と君と秀麗とで、しゅ、秀麗の手料理が食べ

たいのだが……」
「申し訳ありません、叔父上。それは姉さまに存在を認識されてから仰って下さい」
（父上から甘やかすなと言われてますし）
魂の抜けた叔父を置いて九曜はさっさと席をたつ。

やがて戻ってきた吏部官吏は、とてつもなく不機嫌な尚書と対面することになる。

中編

壮麗たる宮と複雑に連なる回廊の数々……まるで現実感を帯びないこの場所は、さながら異世界に迷い込んだような気を人に起こさせる。
それがこの後宮という場所の持つ魔力なのだろう。
（……絳攸殿が迷うのもある意味当然かな。
貴妃や皇子を守るために、迷い易い構造になっているのだから。）
「さて、この先どうやって入り込むか…」

＊　＊　＊

園林で秀麗達は今日もお茶会をしていた。
当然、お茶菓子は秀麗の手作り饅頭。
「なんで膨らむんだ？　成分は同じなのに…」
「秀麗の桃饅は世界一だ」
なにか納得しかねる部分があるのか、ぶつぶつ考えている絳攸に、大好きな桃饅頭を食べられてご機嫌な劉輝。
「お世辞を言ったってもう何もでないわよ」
「お世辞なんかではないぞっ」
「そうですよ、いつもながら素晴らしい腕前ですね」
いつも通りそつの無い楸瑛である。
「そうですか？　なら嬉しいです」
「……何で楸瑛には素直に頷くのだ？」
秀麗は余に冷たいぞ、と傷つく劉輝であった。
と、そこへ女官が器を捧げ持ってやって来た。

「お話し中失礼致します。お湯をお持ち致しました」
「ありがとう。そこに置いて下さ……」
静蘭に頼んだのだけれどどうかしたのかしら、と思いながら振り向いたところで不自然に言葉は止まった。
「秀麗、どうしたのだ？」
劉輝はもちろん、楸瑛も絳攸も秀麗を訝しく思う。しかし、秀麗はそんな男性陣は眼に入らない様子で真っ直ぐ女官を見て叫んだ。
「……九曜！？」
秀麗に見据えられた女官は形の良い唇を動かした。
はい、と。

よくお分かりになりましたね、と続ける九曜を鷲掴み秀麗は言った。
「なっ、なんで貴方、女官の格好なんかしているのよ！」
「なんでって、この格好でないと入り難かったものですから。……似合いませんか？」
（前やった時は、皆似合ってるって言ってくれたんだけど……やっぱり変だったのかな）
「似合って無くは無いけど」
客観的に見て、九曜の女官姿が似合っていないとは口が裂けても言えない。
艶やかな黒髪に黒曜石のような瞳、血のように赤い唇。将来の美女を容易く想像させる容貌だ。
けれど、十人前を自認する秀麗にはちょっと認めがたいのも事実。
「……秀麗殿、一体誰なんだい。紹介してはもらえないだろうか？」
すっかり蚊帳の外に置かれている彼等だったが、流石に気になっていたのか楸瑛が尋ねた。
「失礼致しました。改めまして、初めてお目にかかります。紅邵可が次子、紅九曜に御座います」

主上、藍将軍、李侍郎、と秀麗が何か言うよりも先に、九曜は丁寧に挨拶をした。
「九曜殿、か。知らなかったな秀麗殿に妹が居るなんて」
楸瑛が驚きの声を上げるのに、秀麗は慌てて言った。
「藍将軍、違います。これは私の弟です」
……。
……。
……。
おかしな事を聞いた気がする。それが彼らの正直な感想だった。
奇妙な沈黙の中、恐る恐るといった風情で絳攸が言葉をつむぐ。
「……お、弟？」
「勿論。九曜は男子の名ですから」
（というか何で九曜の名を聞いて妹だと思えるんだ？　彼等の目は節穴か？）
にっこりと笑顔で言う九曜はどう見ても美少女にしか見えない。
「ねえ九曜。その格好紛らわしいから止めてくれる？」
藍将軍構いませんよね、と彼らの混乱を見て取った秀麗が提案する。
「あ、ああ。本当は不味いだろうけど、秀麗殿の妹…失礼、弟でもあるし何とかしよう」
「そうですか？　では御前失礼」
そう言って勢い良く衣を脱ぎ払う。
視界を覆う役目を果たした衣が落ちた後、そこには一人の少年が居た。
顔立ちは先程の女官姿の時と変わらないが、目が違った。
強い意志の現れたその瞳は、彼の性別を男以外の何者にも見せなかった。

「これで宜しいでしょうか」

にっこりと笑う彼の笑顔を見た楸瑛と絳攸は、彼が間違いなく紅家の人間であると確信した。

後編

（本当に私を女だと思っていたのか？　気の流れが全く違うのに…）
つまり彼らに気功の素養はないということか。
つまらない、と思ったがそれはそれで面白いことが出来そうなので、九曜は気にしないことにする。

＊　＊　＊

女官姿を解いた九曜は、普段どおりの簡素な姿になった。この場所には甚だ不釣合いな格好だが、幸か不幸かそれを口にするものはいない。
「姉さま、これでよろしいでしょうか」
「うん、いいわ。さっきの格好じゃ、何だか別の人みたいで……それにしても本当に美人になったね、九曜」
母様に良く似ているわ、と秀麗は笑う。
「それは、まあそうでしょうね、母上の血を継いでいるのですし」
（女顔なのは少々頂けないですが）
「そう？　私全然母様には似なかったけど」
「姉さまはちょっと発育不良なだけですよ。一番の成長期に栄養失調気味でしたし」
ねえ、陛下。と冷たい眼差しを向けられて、劉輝はビクついた。
それを見て臣下の義務として弁護を試みる楸瑛。
「いや、あれは陛下の所為では……」
「無いわけないでしょう。公子が皆莫迦だったのが悪いのですよ」
低い声で、すぱっと切り捨てる九曜。
それもそのはず、共倒れになった公子たちは玉座をより贅沢が出

来るための手段としか考えない者や、母親や外祖父たちの言うがままの者、兄弟への対抗意識しか持っていない者、皆自分しか見えていない愚か者だった。勿論、それに参加もしなかったが止めもしなかった劉輝もそうだ。
王に連なる者はそれだけで、多大な義務を負っているのに。

秀麗はそんな九曜の声が聞こえなかったのか、茶器を用意すると九曜に渡す。
「はい九曜、お茶とお饅頭」
「ふふふ、私は姉さまの饅頭が一番好きなんです」
一番美味しいですから、と九曜は嬉しそうに言う。
「まあ、お世辞を言っても何にもでないわよ」
「本当です！」
「ふふ、ありがとう」
秀麗はやさしく微笑む。

一見とても和やかなお茶の風景だ。

――――劉輝とその側近2名は少し固まっていたが。

暫く大人しく秀麗手作りの饅頭を食べていた九曜だが、みっつめに手を伸ばしたところでぽつりと言った。
「そういえば姉さま、いつまでここにいるおつもりですか？」
お饅頭だけじゃなくて姉さまの手料理も食べたいです、と九曜が可愛らしくねだると秀麗はもう少しだけ、と言った。
「今ね、主上と一緒に絳攸様に政治について学んでいるのよ。一緒にやると約束したの。だから一通り終わるまで待っていてくれない？」
「……それじゃあ姉さま、早く帰りましょうよ」

それを聞いた九曜はにっこりと満面の笑みを浮かべそう言った。
「だからね、九曜。まだ勉強が終わってないから――」
「だって陛下はもう一通りの学習は済んでいるはずでしょう？」

――なんとも言えない空気が流れた。

ややあって秀麗が声を震わせながら言った。
「……九曜、それ本当？」
「はい。陛下は父上より学問を修めましたから、今李侍郎から教えを乞うようなことはそうないはずですよ」
そう、と頷くと秀麗はぎぎぎという音でもしそうな動きで先程から何も言わない劉輝のほうを向き、張り付いた笑顔でこう訊ねた。
「……主上、今の話は真実でいらっしゃいましょうか」

「それは、まあ……本当だな」
口の中でもごもごさせながら、そう言った。
「そうですか。……藍将軍、霄大師は何処においでかご存知ありませんか？」
「い、今頃は三師でお茶でもしているはずだから、多分向こうの宮の――」
予想外に話を振られて吃驚した楸瑛だが、そこは経験でなんとか返答する。
「そうですか。それでは藍将軍、絳攸様、主上。お茶の途中ですが用事が出来ましたので少々失礼しますね」

「えーと、つかぬ事を訊くけど、どこへ何をしに行くんだい？」
「三師のところへ暇乞いに、です」
にっこりと笑うと秀麗は足早に去っていった。

「……秀麗はなんの暇乞いをしに行ったんだ？」

現状を把握し切れてない劉輝がそう尋ねると、丁度饅頭を食べ終えた九曜が答えた。
「『主上の教育係としての貴妃』を、に決まっているでしょう」
「きょういくがかり？」
「お聞きになっていなかったのですか？　姉さまは陛下の昏君ぶりを直すために霄大師に雇われて此処に来たのですよ」
だから目的は果たした今、もう用は無いわけです。
そういうと九曜は足取りも軽く姉の後を追った。
がーん。
とっても分かりやすく劉輝はショックを受けていた。

「で、どうするんですか主上。このまま帰しちゃっても良いんですか？」
楸瑛が顔を向けて尋ねると、劉輝は首をぷるぷると震わせて言う。
「だ、駄目なのだ」
「じゃあ、追いかければいいだろうが」
絳攸がそう言うやいなや、劉輝は駆け出していた。

「おー早い早い。この分だと部屋についた辺りで追いつくんじゃないんかな」
「ばっかじゃないのか？」
残った二人は温くなったお茶に口をつけた。

豊穣祭で一騒動？

『豊穣祭恒例　女装評議大会　優勝商品米俵百俵！！』
秋の気配も深まり、食べ物が美味しい季節になった頃、それは張り出された。

「米俵百俵……」

少年はポツリと呟くと、くるりと方向を変え走り去る。
目的地は悪友の棲家だ。

「で、なんの用なんだ？　九曜」
徹夜明けだった頌栄はようやく寝付いたところを叩き起こされ、非常に虫の居所が悪かった。
しかし、姉とそれ以外という分類しか人類に対して行っていないような節のある九曜には全くどうでもいいことで、気にするはずなどなかった。
「衣装貸してくれないか」
「……いしょう？」
って何の。とまだ動いていない頭は理解できず、鸚鵡返しに言ってはみたもののまだ良く分からない。
「女物の服」
「え、なに、ついにそっちの方に目覚め……」
女顔ということもあって常々思っていたことがつい口からこぼれた次の瞬間、ガンッと音がしそうなくらい頌栄の頭は九曜に殴りつけられた。
「――――ッ」

「面白いことを言うね。誰が、何に、なんだって？」
「痛ってー。冗談じゃないかよ」
ったく本気で殴りやがってー、とぶつぶつ言いながら椅子に座りなおす。
「で、何に使うの女物の服なんてさ」
「あれ」
九曜が指差す先には件の看板が。
「ああ、もうそんな時期か……って何！？　九曜出るの、女装評議大会！」
「そう。商品が欲しいから」
姉さまに差し上げるのだ、と予想を裏切らない九曜に、頌栄は少し驚いてしまった自分に呆れた。
（そうだよ。こいつが秀麗さんのため以外にこんなことするわけないよな！）
「……で衣装、なわけだ」
「そう。なんでもいいから寄こせ」
「なんでもって、優勝目指すんだろ？」
「私が着たら何でも勝てる」
「……そうだな」
九曜の秀麗な顔を見れば異論はない。
（なんでもいいって言ったからには、何をしても文句はないはずで……）
頌栄は少し考えた後、いたずらを思いついた子供のような顔をした。
九曜はそんな彼を見てやや後悔した。
（姉さまに内緒にしておこうと思って、こいつに話したんだけど……失敗だったかな）
頌栄が思いつくことは大体碌でもないことが多く、しかも本人は対岸の火事と決め込むので性質が悪い。

＋　＋　＋

「姐さん！　胡蝶姐さーんっ。起きてるー！？」
頌栄は勝手知ったるなんとやらで、どんどん奥に入り込むと大きな声で呼んだ。
（頌栄……ここ妓楼なんだから、こんな時間に大声出すのは不味くないか？）
妓女は朝から昼過ぎまでが就寝時間となっている。
つまり、まだ昼前の今、殆どの人は寝ているわけで――大きな音を出すことは大問題だろう。
（私はまだ死にたくないよ）

――女性を敵に回してはいけない。

この九曜ですらそう思うのに、なんで頌栄が未だに何度も同じ轍を踏むのか分からない。
そうこうしていると、一際奥まった位置にある戸がスッと開いて、妙齢の女性が現れる。
夜着に一枚掛けただけでも艶やかで麗しいその姿は、間違えようもなく胡蝶である。
「おや、頌栄ボーヤ……何だい。こんな時間に」
機嫌は麗しくなさそうだったが。
「あ、胡蝶姐さん。」
そんな胡蝶に恐れもせずに話しかける頌栄が、人の機微に疎いのか大物なのかは意見が分かれるところだ。
九曜の困惑もなんのその、頌栄は意気揚々と胡蝶に経緯を説明す

る。
「へえ、面白そうじゃないか」
「でしょ！　だから姐さん…」
「良いよ、手伝って上げようじゃないか」
やった！と会心の笑みを浮かべる頌栄、しかし次の胡蝶の言葉でその笑みは凍りついた。
「でも、頌栄。お前さんも出るんだよ」
睡眠の邪魔をしておいてただで済むと思ってないだろうねえ、と。
（……頌栄の罰と同じことするのか、私は……）
出場することを後悔はしていないが、なんとなく悲しい気分になった九曜だった

「さあ、頌栄さんに九曜さん。こちらへどうぞ」
「綺麗にしてさしあげますわ」
いつの間に現れたのか、すっかり身支度を整えた姐さん方が九曜と頌栄を誘う。
「ほら行くぞ」
「何で俺までー！」
「お前が悪いからだ」
足取りも軽くついていく九曜と、その九曜に引きずられて連行される頌栄であった。

姐さん方に玩具にされ疲れ果てた頌栄は、鏡の前で自分の装いを確認している九曜を見て、しみじみと思った。
「お前、本当に綺麗な顔してるなあ。女にしか見えないぞ」
「母上に似たからな。まあ当然だ」
鏡から視線をはずし、九曜は頌栄に向き直る。
「そういうお前もなかなか可愛らしいじゃないか」

「ほっとけっ！」
姐さん方の化粧の腕前が素晴らしかったせいか、頌栄も見事、可愛らしいお嬢さんに変身させられていた。
（ふっふっふ、これでとりあえず商品は確保できるな）
母と姉にそっくりな笑いを胸中ですると、九曜は頌栄をどやしつける。
「頌栄、出番だ。さっさと動け」
「やっぱり嫌だあ！！！」
「往生際が悪いぞ。ほら行く！」
頌栄を放り出すと、九曜も舞台に向けて歩き出す。

（姉さま、喜んでくれるかな？）
既に九曜の心は評議大会後にまで飛んでいた。優勝を逃す気は毛頭ない。

賃仕事から帰ってきた秀麗は、紅邸に届けられていた大量の米俵に出迎えられた。
「姉さま、お帰りなさい！」
「ただいま、九曜。なに、このお米？　どうしたの、これ！？」
山と積まれた米俵に秀麗は驚いたが、事情を話すとにっこりと笑ってくれた。
「ありがとう九曜。嬉しいわ」
それを見て九曜も満足げに笑った。
すべては姉さまの笑顔のために。

西の祭り（前書き）

ハロウィン用パラレル小話。深く考えては駄目です。

西の祭り

「ねえさま。しっていますか？　ずーっとにしのほうのくににはきゅうけつきというものがいるのだそうです」
「きゅうけつき？」
「はい。むこうにいるかいぶつ？　のいっしゅで、ひとのちをすうんです。それでちをすわれたひともきゅうけつきになっちゃうのだそうです！」
「まあ、こわいわね」
「だいじょうぶです！　きゅうけつきは、にんにくとおひさまのひかりによわいから、すぐわかります」
「そうなの？」
「にしからきたっていうたびびとさんにききました。おっきなひとでした！」
「楽しかったの？　よかったわね。あら、襟元に血が……」
「ちなんてついてますか？　うー」
「どうしたの」
「さっき、そのおにいさんにかみつかれたんです。こんなふうにかむんだぞおって」

「……え？」

「お嬢様！！」
「せ、静蘭。どうしたの？そんなに慌てて」
「……先程、遠い西の国から来た旅人が消えました」
「……え？」
「日光を浴びて灰になったので」
「なに、それ」

そんな、さっき九曜から聞いた話のような、でもあれはお話で……

『さっきそのおにいさんにかみつかれたんです。こんなふうにかむんだぞおって』

「九曜！？」

「なあにねえさま？」

首を傾げて愛らしく尋ねる少年の首筋には赤い点が二つ。

――そう、丁度犬歯の噛みあとのようで。

「きょうのごはんはにんにくがないといいなあ」

西の祭り（後書き）

２０１１／１０／２７　誤字修正

それは好意か　はたまた悪意か

お茶請けは秀麗の手作り饅頭。今日のそれは一口大で薄い皮の中に小豆の餡がたっぷりと入った、この辺りだと少し珍しいものだった。先日教わったと言うものなのだろう。

「姉さま、この饅頭おいしいですね。餡も甘いのにくどくなくて……つい食べすぎちゃいそうです」

「本当？　嬉しいわ。たくさん作ったから遠慮しないで食べなさい」

「じゃあ、もうひとついただきます」

最愛の姉と一緒に過ごすお茶の時間、幸せだなと九曜はしみじみと思う。あの地獄を知っていればなおのこと、こんな時間は夢のようだった。

消え入りそうな弟の呟きを耳にしたのは、秀麗が何杯めかの茶杯を干したときだった。

よく聞き取れなかったと彼女が弟に尋ねれば、大したことではないと答えていたが、気になるから言いなさいと秀麗は押し通した。九曜が自分に甘いことを彼女は知っている。

しぶしぶと、九曜が口を開く。

「……嫌がらせなのかと思ったんです」

「嫌がらせ？　何が嫌がらせなの？」

「父上のお茶です。あそこまで苦いと、もう嫌がらせ以外の何ものでもないと思いませんか？」

九曜にはどうやったらあんな味になるのかがもうよくわからない。ただ濃いのとは違う、なんともいえないあの味。あれは経験者にしか共有できない味だ。

何の変哲もないお茶をあんなふうに出来るというのは、ある意味、才能ではないのかと常々九曜は思っている。まあ、そんな才能なんて何の役にも立たないわけだが。

「それは……そうかもしれないけど。ほら、父様って不器用だから」

一瞬同意しかけた秀麗だったが、父が善意からやっていることを彼女は知っていたので笑って答えた。

けれども、九曜は納得できない。

「それも変なのですよね」

「変って？」

九曜は真直ぐ秀麗の方を向いて言った。

「父上は別に味覚がおかしいわけでも、ゲテモノ好きってわけでもないでしょう？」

「それはそうね」

秀麗は頷いた。

でなければいつも菜（りょうり）を美味しいといわれている秀麗の立つ瀬がない。

「ということは、父上はご自分のお茶が空前絶後なまでに苦いということも分かっているはずですよね？」

「……そうかも、しれないわね」

段々と、秀麗の言葉が弱くなっていく。

「そうすると、父上はあのご自分でも分かっているほど苦いお茶を皆に、さも親切からきたように振舞っているわけです」

「そうなっちゃうわね……」

ここまでくれば、流石に秀麗も九曜の言いたいことが分かる。

「ねえ、姉さま。わざと人に苦いお茶を勧めるというのは“嫌がら

せ”って言うんじゃないですか？」

「ど、どうなのかしら……」

秀麗は九曜の言を肯定も否定もしなかった。

父が本当に善意であったと信じているから肯定は出来ないし、かといって否定もできなかった。

大好きな父ではあるが、そういわれると何となく疑わしいように思えてしまったのだ。

それは好意か　はたまた悪意か（後書き）

青茶：烏龍茶に代表される半発酵茶。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7510v/

紅家長男　彼の名は九曜。

2011年12月24日03時48分発行